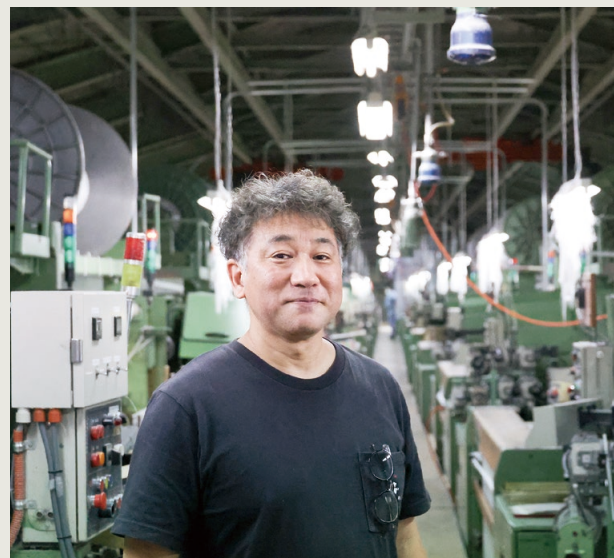




妙中パイル織物株式会社
代表取締役社長 たえなか しょうじ 妙中 正司

織屋が元気になれば、
街も元気に

高野口はパイル織物が盛んで、昭和の頃は日本一の生産量でした。個人の織屋さんの数も多く、街を歩けば「ガシャーン、ガシャーン」と織機の音があたりから聞こえていました。

しかし、昨今の生産量の低迷から、個人の織屋さんはほとんどいなくなり、その機械を修理していた鉄工所さんもなくなってきました。また、織物工場が少なくなるにつれて販売先のお客様が減り、仕出し屋や、食事に行くお店もなくなってしまい、産地が小さくなることで、その周辺の産業にも大きな影響を与えました。

高野口パイルの生産量は、確かに少なくなりましたが、その品質は、今も変わらず世界一のものです。最近では、これまで競い合ってきた織物屋さんたちとも協力し合いながら、産地に活を取り戻そうと頑張っています。

これまでとやり方はちがうかもしれませんが、昔のように産地が元気になれば、街も元気になってくるという思いで日々頑張っています。

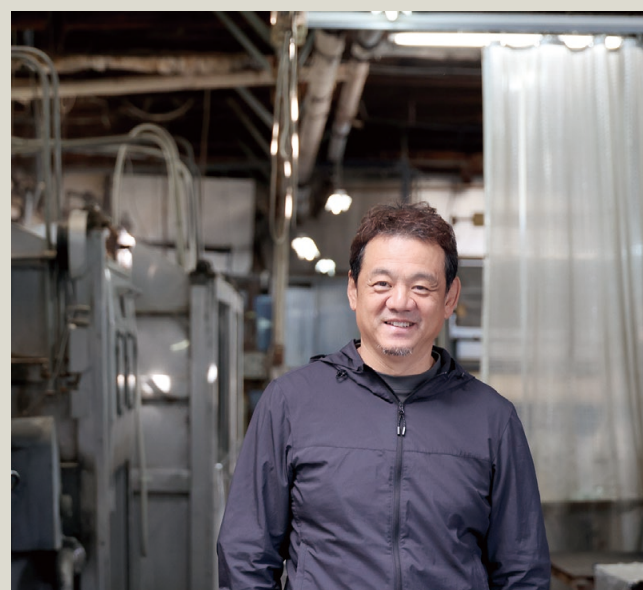
途絶えさせるわけにはいかない

私たちは、「染める」作業をメインに行う染工場です。織屋さんからの依頼を受けて、糸染めや生地染め、プリントなどを行なっています。

高野口パイルは、基本的に各工程で分業されていますので、織屋さんだけがいても加工屋がいなければ、生地は完成しません。逆もまた然りです。そんな高野口パイルの仕事ですが、平成に入ってから減少傾向にあります。売上の多くを高野口パイル製品が占める私たちの会社にとっては、重大なことです。しかし、ここで染め屋を止めてしまうとただでさえ減っている高野口パイルの染め屋がもっと少なくなってしまうです。

私たちの会社は、織屋さんのおかげで大きくさせてもらいました。高野口パイルを残したいという想いで昨今はさまざまな工夫をして、頑張っています。自分たちが止めるわけにはいかないんです。

株式会社木下染工場
代表取締役 きのした しげき 木下 茂紀



3. Interview

伝統を未来へー

地域とともに発展する

高野口パイルは、昭和の終わり頃から産業が衰退して以降、さまざまな工夫と努力によって現在の生産高を維持し、右肩あがりに戻りつつあります。しかし、依然として一般的にその知名度は低く、私たちも高野口パイルの知名度を上げようと頑張ってきましたが、なかなか難しい状況でした。

そんな中、ある日、自社の展示会に隣に住んでいるおばあさんが来られたことがあったのですが、展示品を見られた後に「こんなものを作ってたんや。ええなー」と言われたのが衝撃でした。よく考えてみると、私たちの活動というのは、外向きの活動や事業者に向けた商売しかしてきませんでした。つまり高野口パイルの個人顧客（ファン）を作れていなかったのです。市民の方もご存じないと思いますが、近頃ファッション雑誌でよく目にする「フェイクファー」や、「エコファー」という言葉は、もとは高野口パイルが発祥の言葉なんです。これからはこういったことをPRするとともに、一般の消費者に向けたプロモーションを行い高野口パイルのファンになっていただきたいと思っています。

近頃は、たしかに海外の安い製品でも、品質が良いものがたくさん出てきています。買ってすぐの手触りは大きく変わらないかもしれませんが、しかし、大量生産がゆえに買った当初の風合いや手触りは、すぐに劣化しがちです。また、生産する過程で、多量の柔軟剤を投入したり、大量に廃棄したりと環境によくない部分もたくさんあります。

高野口パイルはそういうモノではなく、染料を厳選したり、風合いをどうやって出すかを、常に考えています。少し値が張るかもしれませんが、今年買ったものを来年も大切に着てほしいという思いです。市民の皆さんには、「昔はすごかった」ではなく、今の高野口パイルの良さについて知っていただき、地域と一緒にこれからの高野口パイルを発展させていきたいと考えています。



紀州繊維工業協同組合 理事長
株式会社岡田織物 代表取締役

おかだ つぐひろ 岡田 次弘



紀州繊維工業協同組合
WEBサイト

